

「駄目だ。これは修復しよつがない」。嘉島町の熊本南工業団地の一角にある鋳物工場「原田鋳造所」。

熊本地震の本震が起きた4月16日未明、すぐに駆け付けた原田万稔社長(45)は、工場の「命」とする溶解炉の損壊した姿に、しばし立ち尽くした。高さ9メートル、重さは2ト近い溶解炉を支える4本の支柱のうち2本が折れ、崩れ落ちる寸前だった。

14日夜の前震でも炉は被害を受けたが、「1週間ほどで復旧できる」と安堵したばかりだった。本震のダメージは決定的。それでも「廃業は全く考えなかった」と言つた。「会社と社員を守らねば」。すぐに再起に向け、動き始めた。

祖父が創業し、父から受け継いだ工場は50年以上の歴史を持つ。従業員は10人。船舶用エンジン部品の製造

工場復旧 “仲間”がエール

原田万稔さん(45)

原田鋳造所社長

を主力とし、大口取引先を十数社抱える。昨年は年商1億2千万円。経営は順調だった。「これまで会社に尽くしてきてくれた社員に迷惑は掛けられない」。休業はせず、在庫品を現金に換えるなどして雇用を維持しながら、原田社長は復旧を模索

した。

溶解炉の撤去と新設、天井に穴が開いた事務所の建て替えも合わせ、復旧費用は最低でも5000万円。資金繰りに奔走した。約1000万円の溶解炉を購入しようとして、取引先の商社に相談すると5月中旬、思いも掛けない話が舞い込んだ。

「東大阪市の溶解炉メーカー『ナニワ炉機研究所』が、炉を無償提供したいと提案しています。『ものづくりの仲間を支援したい』とのことです」

これまで付き合いのなかったメーカーからの提案に戸惑ったが、「とにかくありがたい。神様のようだ」と感じた。

ただ、「そこまで迷惑は掛けられない。最低限は支払いたい」と見積もりを求め、「相場の半値以下」での購入が決まった。

7月初め、溶解炉の部品が工場に届いた。現在、原田鋳造所の従業員が、炉の内側に耐火れんがを張る作業を進めている。下旬から溶解炉を組み立て、8月には生産を再開できる見通しだ。

工場が稼働していない間、取引先から納期を記していない注文書が届いた。「生産再開を待っているぞ」。そんなエールを込めた、粋な計らいだった。「多くの人に支えられていることがうれしかった。工場の灯を決して消してはならないと強く実感する日々です」と原田社長。工場の復旧が済み次第、溶解炉を提供してくれたメーカーを訪ね、直接お礼を言つつもりだ。

「その日が待ち遠しい。再開に近づく真新しい溶解炉に目を細めた。」

(上田良志)



新しい溶解炉の内部に耐火れんがを張りつける作業を見守る、原田鋳造所の原田万稔社長(右)＝嘉島町

あの日から

熊本地震 3カ月

2016.7.17 ④